

不遇であつた哲夫君

佐藤 連

『哲夫君が死んだ。』と言ふ葉書一枚が非常に大きい力で私をブン打つた。私は山本氏からの短い通信をうけさる迄の間殆んど何も知らずにゐた。全く幸福に京都にゐる事さのみ信じてゐたのだ。知己友人、——それは誰かの言つた様に『知らぬ間に深交を結ぶが別れは明瞭なものだ』と言つた言葉は今新しく思ひ起さずに居れない。私と哲夫君とは盛岡の師範時代に繪を中心とした白楊會同人として初めて知り合つた。大した繪でもなかつたけれども色彩に富んだ光を主にした繪をよく書いてゐた。白楊會を産んだのも君等と一所であつた。首から背迄を一直線にのした哲夫君が細い身體を外套にくるんで黒い硝子入の額縁を持ち廻つた展覽會の情景が、眼の底にこびりついてゐる。何事にも非常に熱心であつた君の行き方はこの方面にも見られた。靜物を得意にしてゐたが殘念な事に今其の作品の何物も手許にない。尤も熱心——は殆ど病的であつた殊に病を得て後の君の熱心——と言ふよりも凝り方は極端であつた。天文の事に興味を持ち出したのもその頃で確しか三年の頃からである遂に町で眼鏡を買つて來た君はその器用な手先で馬糞紙やら木工具やらで望遠鏡をつくり上げたものだ。毎夜校庭に無格好な三脚を築立てゝ、お空を仰いで獨り楽しんでゐた。そうだ獨り楽しんでゐたのだ。哲夫君は最後迄その樂しみを賣り物にはしなかつた事と信ずる。君はその事を誇りさもせずパンの種とせうとも思はなかつた。こんな

調子であるのと病氣であつた爲に師範時代は頗んど親しい友がなかつた。極端に結核を嫌つた餘感に極端に肺患者を遠ざけた。君は最早卒業する時に寄宿舎を離れて市外の庵寺に寄過しなければならなかつたそれに學究的で、熱中してゐた君からは自然、所謂友人の影が遠のいたのだ。全く遠のいた。華かなるべき君の中等學校時代は斯くして、非常に不遇に（少なくとも外見）終つた。卒業後君は小學校に奉職する可く健康が許さなかつた爲一年以上郷里、氣仙にゐた。が天文の興味は益々加はつてその頃數度ならず水澤に出て來て緯度觀測所に詰めた。其の頃である君はよく私の家を訪れて呉れた。訪れると言ふよりも宿にしてゐたと言つた方が適當かも知れない私の家族の者は随分君の病氣を苦しめたけれ共私は何うしても君を憐れずに居れなかつた。一所に寢床に入つて更くる迄いろいろの話をしたのもこの時である。私と哲夫君との交際は學校時代よりもこの頃に至つて深くなつた。寢乍ら病氣の話、天文の話、繪の話までは宗教談に入つて大いに語つた事であつた。君は『靈の永遠性——そんな事は考へて見た事もない。只僕は靈肉分致——を信ずるそして神は天地の絶對だ。名前は何でも好いぢやないか——僕の神様がそれは便宜上先祖傳來の神乍らの神様だ——然し宗教は大切なものだよ——』等と言つた君の宗教論は随分御都合のよい不徹底なものではあつたけれ共、負けきらがで、頑固な君はその説を譲さうにもなかつた。そんな所も一つは友人のなかつた原因の一つであつたかも知れない、それでも又一方には『町の方へ出て來るさ何よりも豆腐の味が好いで嬉しいがす』等と私の母を相手に味噌汁を啜る程の愛嬌もあつた私の知る様になつて以來の君は常に醫藥を離さない弱い男、細長い

男であつた。が一度奉職してからは全く健康を恢復し、と自稱する程ガツシリと肉もつき骨も太げに見えた。京都に出る時水澤の停車場で成功を祝した握手が、君と相見る事の最後であつたのだ。喜びに輝いた健康さうな君の顔も姿も今は皆無であり過去である。

知らずにゐた時は何も思はなんだのに、死んだと言ふ言葉が淋しいのか。

おゝ哲夫君、君の短かゝつた生涯は外見、その凡てが不幸であつたかも知れない。然し君は、君獨り丈の知れる幸福を抱いて去つたのだ。ナア君！その幸福丈は君の盡きぬ生命だ。

× × × × ×

私は今哲夫君の遺したものを何も持たない。只私の母に送つて呉れた君の郷里名産の醤油が黄白く固つたまゝ瓶の底に、残つてゐる。やがて春のぬくもりさ一しよにパラビンの様な肌を開いてぬら／＼と解ける事だらうに。——三月廿三日夜

我が兄のこと

佐々木萬夫

永い間兄が非常に御世話を受けました山本先生から本號に關し御親切な御ことがありましたので。頗る粗雑乍ら京都に出るまでの生活の、外に表はれた部分を、二、三心に浮んだまゝ、書いてみや

うと思ひます。

兄は元來が身體が弱かつたので少さい時分から鐵劑とか、根那煎だとかいふ強壯劑を常用して居ました、からだが弱い上に、可なり強情で自分の考へた通りを自分もやり、他人にもやらせなければ承知しない、極端に近い程他と同化することの出来ない質だったので、外に出て遊ぶこともあまり好まず、家の中にばかり居る方が多いやうでした、そして獨りで種々の物を細工しては喜んでゐました、不器用ではありましたが、自ら種々のものを作るさうな可なり趣味を持つてゐたやうに思はれます、ことに、小學校を卒業して、縣の師範學校に入學する迄の一年間は、自分の居室を細工場にして殆んど終日の中に閉籠つて、模型飛行機だとか、寫眞器の暗函だとか、其他、顯微鏡、小さな電氣の機械等種々雑多なものを細工すること毎日の仕事としてゐました。

その後師範學校に入學しましたが、二年の頃風邪が基になつて消化器を害し、可なり永い間苦しめられ三年になつてからは、今度は氣管枝カタルの名の下に病む様にたりました、随つて學校の方は欠席勝になりましたが、その頃から繪を畫くことに趣味を持つやうになりました、歸郷靜養中にも、學校に復つてからも、天氣の具合よく、からだの具合も左程悪くない時にはよく寫生に出かけることがありました、それと同時に、に空を眺めることが好きになつたやうに思はれます。

悠久な、無邊な、世事を遠くはなれ、しかも美しい天體を、それ等の間に起る現象とは若くして病む者の心を引きつけるに充分なる何物かを待つてゐます、そして、その歩みは如何に遅くとも、そ